

資質・能力を育てる国語科カリキュラム・マネジメント —生きている尊さ、切実さを実感させる授業開発（小学校1年・6年）を例に—

Language Arts for Developing Competencies and Capabilities
— Class Management for the Respect for and Preciousness of Life
(The first and sixth grade of elementary school)

佐藤 洋一、左近 妙子
Yoichi SATO, Taeko SAKON

要旨

2020年4月から資質・能力型に基軸を置いた新学習指導要領による小学校教育が検定新教科書により全面実施される。授業改善の鍵である「知識の理解の質を高め資質・能力を育む『主体的・対話的で深い学び』」、何をどう教えるかよりも結果として「『何ができるようになるか』の明確化」の重視、そして、教員個々の新たな課題である「(各学校における)カリキュラム・マネジメントの確立」等（新学習指導要領）、今までの教育観や指導・評価観だけでは対応できない教育課題の実践提案が緊急に求められている。

とりわけ、教育課程編成（カリキュラム・マネジメント）や教科横断的学習、総合・探究的な学習等の「学習の基盤」（新学習指導要領「総則」「国語科」等）とされる国語科を中核にした実践的な教育課程編成が重要である。

本稿は資質・能力型の系統的なカリキュラム・マネジメント開発の観点から、小学校教育のスタートカリキュラムである1年生とゴールの6年生を例に、国語科説明文教材をいかしたカリキュラム開発を提案するものである。特に、今、ここに生きて在ることの尊厳と切実さの自覚、その言語化・メタ認知化を「学びに向かう力、人間性等」やそれ等の評価基準開発等との関連から具体的に論じた点に特色がある。

Key word

資質・能力 カリキュラム・マネジメント 生きている尊さ 小学校国語

1 新たな教育課程編成、何がどう課題なのか？—授業に実践と理論を—

2020年度完全実施新学習指導要領(小学校)の教育課程編成の構造化をめぐり、各種学会や教育研究会、教育委員会、教育現場等では求められる資質・能力、アクティブ・ラーニングの視点に立つ授業改善やカリキュラム・マネジメント、「主体的・対話的で深い学び」「学びに向かう力、人間性等」の開発と評価方法が様々な立場や観点から提案、論議されている^(注1)。

これ等の議論は誤解をおそれずに言えば、戦後以降の教育方法、授業研究・教育課程編成全体の構造等を、世界的動向を踏まえた資質・能力育成型教育、認知・非認知能力やメタ認知能力等を含めた次世代コンピテンシー・ベース型教育への転換と言う観点からの問い直しとみることができる^(注2)。

もちろん、こうした大きな転換や教育政策自体の方向や論点を批評的に見る研究学会や御立場もあることは承知している^(注3)。ただ、これまでのこうした議論の中で欠落しがちなのは、(1) 海外の文献や翻訳等を踏まえた批評だけで具体的な授業に生きる提案がみられないこと、(2) 教科を学ぶ価値や意義・本質(見方・考え方)の重視が「総則」等で強調されているにも関わらず、教科の特質や本質(習得)を踏まえた活用・探究的な教育課程編成への視点が見られないか希薄なこと(安易に総合や探究等の学習に拡散していく傾向)、(3) さらに、児童生徒達の学びの姿を具体的にどのような評価方法で見取り、フィードバックしていくのか等の提案がみられないこと等である(下線部は佐藤・左近による、以下同じ)^(注4)。

2019年4月以降、各校は新学習指導要領「総則」や「第3期教育振興基本計画」(2018年6月15日閣議決定・文科省生涯学習政策局)を基にした教育委員会や学校長の基本方針を受け、教務主任や研究主任による具体的な教育課程編成が始まる。

新学習指導要領による教育結果責任のためには、まず教科の本質や特質(見方・考え方)に根ざした「主体的・対話的で深い学び」の構築、各教科や道徳等にもつながる教科横断的な学習の再構築、現代的な教育課題にも対応できる汎用的な学びやリテラシーをもとにした教育課程編成が大きな教育課題になると思われる。

2 「知識の理解の質を高め資質・能力を育む」国語科カリキュラムとは

アクティブ・ラーニングの方法による課題発見・解決能力の育成、主体的能動的・協働的な学びによる深化とメタ認知化方略の具体的な在り方については、これまでもジグソー法や反転学習、学びの共同体、浅い学びから深い

学びへ等が提案されている。一方で「1」でも触れたようにコンピテンシー・ベース教育への批評、各教科等の本質の重視とそれを越えた教科横断性・汎用性の関係の再構築に対する危惧等、多様な論点も出されてきた^(注5)。

アクティブ・ラーニングは学び型の一つの手法であり、目的は「学びの質」「質的な価値ある深まり」の獲得、答えのない時代に授業で「習得・活用」した学びの方略を自己課題や生活経験・生き方と結び付け、「一般化・汎用化(探究)」できるようなメタ認知能力の育成にあるとすることができる。そのための主体的・能動的な学習システムの開発・再構築が必要である^(注6)。

以下、「知識の理解の質を高め資質・能力を育む」、つまり「質の高い深い学び」を創るためのカリキュラム・マネジメントのポイントを4つに整理して述べることにしたい。

(1) 「学びの質、深まり」を重視する段階的学習過程

アクティブ・ラーニングは「学びの質、深まり(ディープ・ラーニング)」を重視する観点から選択・構想し、単元構想・指導過程に位置付ける必要がある。第一に「習得」と「活用」の確かな定着が意図的に構想されていることが不可欠であること、第二に教科の本質的・原理的な魅力(深い理解、発見・共感等)にあった学び方(学びのモデル)を身に付けさせていること、第三には指導過程(単元構想)のステップに「習得・活用」段階、学びの質・深まりを促すような指導・支援がどう位置付けられているか、言語活動の効果的な選択と位置付けの妥当性・系統性等が鍵となる。

(2) 結果として「何ができるようになるか(なったか)」のメタ認知化

学習指導要領構造化の基軸として整理された「三つの柱」(「何を知っているか、何ができるようになるか」の明確化に伴い、「知っていること・できることをどう使うか」「どのように社会・世界と関わり、よりよい人生を送るか」)は、子ども達が身に付け、結果として「生きる力」に転化できるような学びの「振り返り(学びの一般化・汎用性)」「メタ認知化」の観点やレベルを構想する必要がある。学びの汎用性・メタ認知化を重視する観点から到達目標に対応した「振り返り」の新たな開発が必要となる。

これは同時に各教科の特質を踏まえ、その重層性や往還・汎用性をマネジメントするこれからのカリキュラム・マネジメント(教育課程編成)の視点でもある。

(3) パフォーマンス課題と「質の高い深い学び」

文部科学省及び国立教育政策研究所等による新教育課程作成のための重要な公的資料「評価規準(基準)」の刊行は2018年度内に予定されているとのこ

とだが、何がどうなれば（できるようになれば）活用力としての「思考力・判断力・表現力等」が高まった、あるいは身に付いたと言えるのか。浅い学びや表層的な理解から主体的・能動的な「深い人間的な学び（批評的・創造的な学び）」につなげるための指導と支援・評価の観点とは何なのか。

こうした評価方法の開発を具体化するためには、基礎的・基本的な知識・技能の「習得」段階を超えた説得力ある論述やプレゼンテーション、多様な文脈に応じた活用・複合型のテキスト形式による「新たな表現力（判断力）」の解明が求められる。例えば、現行学習指導要領「国語科」でも位置付けられている、詩歌や随筆、物語等の創作と評価観、鑑賞・批評文を書き論ずる、評論・論説を批評する等の言語活動である^(注7)。

(4) テキスト形式論とアクティブ・ラーニング

これから求められる資質・能力では、多様なテキスト形式に対するいわゆる「熟考・評価」、つまり日常生活で出会う多様なジャンル・テキスト形式の文章や表現スタイル・論述に対時的確な解釈・分析・評価できる判断力、自己の生き方・価値観の形成、集団や組織のためによりよく修正・改善、提案できる資質・能力が求められている。

しかし、こうしたいわゆる各ジャンルの特質(テキスト形式)、その重なりやテキストの固有性・系統性等を踏まえた授業研究や指導（各社教科書の手引きも）は十分とは言えない。特に「書かせても何をどう評価したらいいかわからない（思考力・判断力・表現力等の評価）」という教育現場の戸惑いが多いのが実情である^(注8)。

論理の飛躍や意図的な誤魔化し・すり替え、悪意ある価値観等がまぎれ、あふれている現代をたくましく生きる力を育てるという観点からみると、特に国語科「習得・活用型学習」が基盤になる。論理的にまとめわかりやすく論述する力、自分の問題意識や関心、観点から情報を選択・構成し、説得力のある表現にまで高める力、さらに多様なテキスト形式を活用する力との関係や評価をどう考えていくのかがポイントとなる。

3 今、生きて在ることの尊さと「学びに向かう力、人間性等」

教育現場での実践化と評価が困難であるとされ、混乱が見られるのが新しい教育課程・授業構想と評価観の鍵となる「学びに向かう力、人間性等（の涵養）」の「学びの『質』を高める」部分の育成と評価である。学習を通してどのように社会や世界と関わり、どう主体的により良く豊かな人生を送るか等、児童生徒の「生き方」や価値観・感性の更新に直結する「深い人間的

な学び」の形成、個人と社会の成長につながる教育システムの開発と検証が必要不可欠である。子どもたちの価値判断や内面に手を入れるべきではないとの批評もあるが、これからの学びの本質は表層的な知識の再現や量ではなく、学びの内面化を通じた「態度の形成や価値ある問い、探究の過程（批評的・創造的な学びの探究）」にこそあると私は考えている^(注9)。未だ明らかになっていないこのような部分の理論化と実践開発が今後重要である。

そこで計測と評価が難しい「学びに向かう力・人間性等（の涵養）」の領域を国語科学習の習得・活用と関連させ、価値観や感性、生き方等態度の形成につながる学習を構想した。今、ここに生きて在ることの尊さの自覚は自己と現実を受け入れることであり、生と身体・時代に対する畏敬の念の基盤であり、自己効力感や有用感の基礎となる。子どもたちに「生きていること」の尊厳と価値を実感させ、「生きる」こととは何かについて自分の言葉で論理的に表現する言語活動を構想する。これは国語科言語能力育成を通してたくましく、自分らしく「生きる力」の育成を探る試みである^(注10)。

近年、子どもたちを通して明らかになった実態の一つに自己を環境の中で相対化し客観的に見つめたり、自分の存在意義を実感したりする「生きていること」に対する実感が希薄であることが挙げられる。生まれた時からパーソナルな現実が溢れる情報化社会で生きている子どもたちは、人と人、人と地域、人と自然とのリアルな関りが希薄で、「今、生きている」という実感が乏しいまま成長してしまうケースがままある。子どもたちが周囲の環境、自然との共生意識を育て、生きていることの実感と幸福感を高め、この先もたくましく生き抜く意欲をもたせたいという思いをもち、国語科で、言語の教育として何ができるのかという視点から国語科説明文をいかしたカリキュラム開発を行った（資料1・2）。

4 「だれが、たべたのでしょうか」のカリキュラム・マネジメント

—テキスト形式を生かすカリキュラム開発（小学校1年）—

(1) 児童の実態と説明文「だれがたべたのでしょうか」（教育出版・小1）

小学校低学年は、現象や事実・生活経験における「言葉による見方・考え方」（学習指導要領国語科、教材を学ぶ価値・意義）を働かせて言葉で捉え直し、思考力、判断力、表現力等を育成する基礎を育てる極めて重要な時期である。学級という集団の中で他者に伝えたい内容や自分らしい考えをどう持つか（読解と考えの形成）、どのように聞き、伝えれば理解してもらえるかを（目的・場面等に応じた話す聞く）、子どもたちが楽しみながら考え、学力を

身に付ける授業をする必要がある。さらに生活科との横の関連、小学校3年以降の理科・社会科等の教科に系統的につながる縦の観点から、また学級・集団の中での共感能力、公共心、生きる力等の「非認知能力・スキル」を育成するという総合的な視点から、国語科説明文をいかした（国語科学習を基盤にした）カリキュラムを構成することが重要である。

教材「だれがたべたのでしょうか」は、現行の1年生上の教科書掲載の説明文教材である。説明的文章の基本構成（はじめ・なか・まとめ）となっているため論理的な文章構成の方法や読解力を低学年の段階から系統性を見通して育成することができる。また説明に写真・データが効果的に活用されていることから、写真・データ情報を読み解く方法（情報活用・評価リテラシー）や写真・データの情報を文章と結び付けて読み取る力、さらに写真・データを活用したプレゼンテーションの方法を身に付けることができる^(注11)。

また「だれがたべたのでしょうか」は、野生の生き物が残した足跡や糞、食痕といった「生活痕」、いわゆるフィールドサインを扱った教材である。地球の自然環境は、地球の人口増加に伴い生物多様性が急速に失われている。一方で科学の発達した現在でも、地球上に住んでいる生物の種10%ほどしか分かっていないと言われる。つまり、生物多様性そのものも解明されていない状況にあると言われている。フィールドサインという現象・事実をきっかけに地球上に住む生き物の存在や暮らしに関心をもち主体的に究明する視点をもつことは、地球の将来を担う子どもたちに必要不可欠である。小学校に入学し義務教育がスタートしたばかりの1年生ではあるが子どもたちにとって興味・関心の高い動物を対象とし、自然環境の中で生き物が「今、生きていること」、そこから「生きるとはどういうことか」を学ぶことも非常に価値があると考える。

基礎・基本的な論理的文章のテキスト形式の特徴を備えた「だれが、たべたのでしょうか」のテキスト形式の特質を生かし^(注12)、児童に説明的文章を読む楽しさと方法を身に付けさせるため、義務教育スタート時期の小学1年説明的文章の学び方の観点を、以下の5ポイントとして整理した。（ ）内は新学習指導の「読むこと」「書くこと」等の指導観点をいかしたものである。

- ① 筆者の主張（メッセージ）と文章内容（テキスト内容）の大体を正確に捉える（メッセージの正確な理解から「考えの形成」へ）
- ② 説明的文章の論理的な文章構成を知り、写真・データ情報と文章の重要な語や文とを結び付けて読み取る（具体的事例の正確な理解）
- ③ 「生き物の跡を見付ける」というテーマに合う情報を選ぶ（情報の収集・

内容の検討)

- ④ 「はじめ」「なか」「まとめ」の論理的な思考の型を活用して、自分の考えや思いが明確になるようにスピーチ原稿を書く（情報発信と内容構成）
- ⑤ 対話や交流を通して自分の考えを広げ、学んだことを自らの生活に生かす（「共有」と学びの再構築）

(2) 授業展開—習得から活用・探究へ—

① 習得型学習1〈導入〉(1時間) —学び方の習得と課題のもち方—

導入では子どもたちの身近な生活の中から課題を発掘し・興味・関心をもたせるために校庭の花壇の植物の写真を見せて「誰が食べたのでしょうか」と問い掛け、教師によるモデルスピーチを行う。子どもたちに学習過程のゴールを示すとともに、学習の見通しをもたせ身に付ける資質・能力を具体的に提示する。

その後、説明文「だれが、食べたのでしょうか」を読ませ音読練習をしてすらすらと読むことができるようにする。教材本文の音読後「興味をもったこと、疑問に思ったこと、大切だと思ったこと」について一人一人に初発の感想を持たせ、次時に児童の課題を解決する場面を設定する。

② 習得型学習2〈基礎〉(2時間) —正確で豊かな読み方の習得—

小学校教育導入期で最も必要となるのが、論理的文章の構成理解・メタ認知化させることである。教材文のキーワードを1枚のシートにまとめ、文章構成が「はじめ・なか・まとめ」の基本形であることを教える。

また小学校低学年は、表・グラフ・イラスト・写真・動画等も文字と同じように情報の一つとして読み解く情報リテラシー育成の基礎となる時期でもある。ここでは写真と文章を結び付けて読む力を楽しく身に付けさせるために、教材で使用された写真を用意しておき、それぞれが写真を選び、並べ替えて学習シートに貼り付ける学習を行う。次に、具体例を正確に読み取る方法を学ばせる。この教材では3つの具体例が選ばれているが、三つとも「問い→答え→理由」という思考の型が伝わっていること、また写真を活用した説明、プレゼンテーションの方法を理解させる。

③ 活用型学習 (1時間) —写真と文章を結び付けた精査・解釈—

確かな学びとしての習得と主体的な探究をつなぎ、クッションとなる活用型学習の段階である。習得した具体例の思考の型を生かし、本文の最後に載せられたウサギとその食痕の画像を活用したスピーチ原稿の書き方をモデル的に学ぶことで自分から発信する学習につなげる。

この段階では一人一人が伝えたいことを「書くこと」が重要である。論理

的に話す・聞く力は、書くという行為を通してしか育成できないからである。そのため学習シート（資料3）に書き込ませ、学級全体でスピーチ原稿を完成させるようにする。

④ 探究型学習（3時間）

—生き物が生きている証についての「自分の考え」の形成—

探究段階では児童が自分の興味・関心を基に、主体的に課題を発見し「自分の考え、思い、意見」を形成する。ここでは自分が選んだフィールドサインについて学んだ思考の型を生かしたスピーチ原稿を書かせる。1年生という実態を考えると自分で生活や本の中からフィールドサインを見つけることができない子どもたちが大多数であるので、表面に動物とその動物のフィールドサインの写真、裏面にその詳しい説明を載せたカードを学級の人数分準備し（以下例）、子どもたちが自ら選ぶことができるようにする。

表 生き物とフィールドサイン例

生き物	フィールドサイン	生き物	フィールドサイン
カラス	巣	フラミンゴ	食べた跡
ミミズ	もぐった穴	アカリス	隠した餌
アリ	巣の出口	バイソン	泥浴びの跡
モンシロチョウ	葉	ラクダ	足跡
ザリガニ	抜け殻	シカ	古い角
イノシシ	食べた跡	アナグマ	食べた跡
クマ	足跡	アザラシ	歩いた跡
モグラ	もぐった穴	チーター	足跡
サル	食べ跡	キツツキ	つついた跡
ツバメ	巣	ホタルの幼虫	抜け殻
カタツムリ	這った後	ビーバー	食べた跡

その後これまで使ってきた学習シートをモデルに「たべたあと」シートか「生きているあと」シートを使ってスピーチ原稿を書かせる（資料4）。

全員がスピーチ原稿を完成させたら学級で「いきものあとクイズ大会」を行う。スピーチ原稿を基に写真を提示してフィールドサインを紹介し合う。ここでは、話し方・聞き方の評価の仕方と観点を確認し、自己・他者評価を行い、話し方や聞き方の良かった点について意見交流させる（資料5）。

⑤ まとめ・振り返り学習（1時間）

単元を全体通して学んだことや考えたことを書かせ、交流することで身に付けた資質・能力を確認し、学びを共有するとともに、次の国語の学習や他教科の学習、生活の中で生かせることについて自覚させ言語化させる。

（3）情報の扱い方に関する事項・持続可能な社会の担い手を育成する国語科授業の可能性

実際の授業では、すべての児童が生き物とそのフィールドサインを選び、論理的なスピーチ原稿を書いてそれをもとに発信・交流をすることができた。ほとんどの子どもたちは教師が事前に準備したカード（表面に動物とその動物のフィールドサインの写真、裏面にその詳しい説明を載せたもの）から情報を選択したため支援がしやすかった。一部の生き物好きの子どもたちは図書資料などから主体的に生き物とフィールドサインについての情報を収集することができた。

今後、様々な媒体の中から必要な情報を取り出したり、情報同士の関係を分かりやすく整理したりする力を育成することは必須である。小学校低学年から発達段階に合わせて教師が情報をフィルターに掛け、選択した情報を教材として使いながら、情報と報とを比較し、関連付ける学習を計画的に行う必要がある。

単元の子どもたちの学びの振り返りでは「いろんな生き物のあとがあるんだなと思った。公園や、キャンプで山に行ったとき、生き物のあとをさがしてみたい」（生物の多様性）、「生きていると、あとが残るんだなと思った。生き物はおもしろい」（生の実感・生きることの尊厳）「見えている生き物だけじゃなくて、森の中にはたくさんの生き物がいることが、生き物のあとを調べると分かるんだと思った」（人間以外の視点・命の尊さ）等の感想が出された。

単元を通して子どもたちが学習課題について理解したこと、できたことを超えて、自分自身の今後の生き方に関わる気付きを獲得することができた。フィールドサインという現象の分析・考察・交流をきっかけに生物多様性や地球環境保全の視点に気付かせ、持続可能な社会の担い手である子どもたちを育てる国語科授業の可能性をも示すものであると考える。

5 「生き物はつながりの中で」のカリキュラム・マネジメント

—テキスト形式を生かすカリキュラム開発（小学校6年）—

（1）児童の実態と「生き物はつながりの中で」（光村図書・小6）

小学校6年生は小学校の最終学年であり中学校入学後の各教科学習や言語活動が効果的に行えるように橋渡しをする時期でもある。小学校6年の終わりまでにどのような資質・能力を全員に身に付けさせるのか。5年生までに求められている言語能力は十分に身に付いているか、足りない部分はどこか。それらをどのような授業・教材で補い高学年としての学びを構築するのか。このような系統的、大局的な観点から小学校6年生国語科学習をいかした(基盤にした)カリキュラム開発を行う必要がある。

また、この時期の児童は、自分らしい考えの価値、説明や報告の着眼点や解釈の位置付けを求めている。習得型学習も大事にしながらも、ただ基礎・基本だけを繰り返すのではなく、活用・探究型の学習の中で基礎・基本を確認し立ち返ったりすることや学習方法の意義や系統性、評価観を分かりやすく示したりしてカリキュラムを構成すると、子どもたちの主体的な学習意欲を維持することができる。

教材「生き物はつながりの中に」は、理学博士であり JT 生命誌研究館館長の中村桂子氏による書き下ろし説明文教材である。ロボットの犬と本物の犬との対比をきっかけに「外から取り入れたものが自分の一部となるという外とのつながり」「変化・成長をする時間をこえたつながり」「長い生命の歴史の中におけるつながり」という生き物の三つの特徴について述べ、「つながりこそが生き物らしさ。生きていることはすてきなこと」という主張に結び付けられる^(注13)。

近年コンピュータの性能が飛躍的に向上している。人工知能を用いたビッグ・データの蓄積やビジネスへの活用が始まり、第三次人工知能ブームが起きると同時に、シンギュラリティの可能性や脅威が議論されるようになった(シンギュラリティ2045等)。

コンピュータやインターネットの急速な進化による子どもたちの生活への影響は非常に大きく、短時間に大量の情報を手に入れることができるようになった。しかし、情報の中には誤った情報や不要な情報が多い上に、コンピュータを用いたバーチャル体験の増大により、人間関係の希薄化や子どもたちの「生」の感覚や実際の生活体験の不足等が大きな教育問題となってきている。

筆者である中村桂子氏が「生きものは機械とは違う。生きものの生きものらしさを大切にしましょう。この文で考えたいことはこれです。まず大切なことは、生きものはつくるものではなく生まれるものだということです」^(注14)と述べているように、科学技術や効率化ばかりが優先され人間が生き物であ

ることを忘れがちな現代において、生き物の特異性と命の尊厳を実感させ人としてよりよい生き方を考えさせることが公教育の重要な使命である。

「生き物はつながりの中に」は、論理的な文章の読み方・書き方を学ぶ「報告・論文」の構成の型をもつ基本的なテキスト形式である。「生き物はつながりの中に」のテキスト形式の特質を生かし、ある立場からの主張・説得や説明の方法、論理的な構成とキーワード理解、引用と要約の方法、具体例と資料選択の方法、筆者の立場や専門性と説得力等の資質・能力を育てるため、学び方の観点を、以下の6ポイントとして整理する。

- ① 筆者の主張（メッセージ）を正確に読み取る（メッセージの正確な理解から「考えの形成」へ）
- ② 筆者の主張の背景・前提にある「時代的な価値観・常識的な価値観」を理解する（筆者の立場と生き方、※前提となっている価値観の明確化）
- ③ 選ばれたエピソード内容、テキスト形式の特質を読み取る（科学技術優先社会への批評、生命の尊厳）
- ④ 自分の興味関心・課題意識から「生きていること」についての自分の考えを持ち、論理的に書く（「考えの形成（深化）」「構成・表現」）
- ⑤ 対話や交流で「自分の考え」を形成・深化させ、自らの生き方や価値観に生かす（「共有」と学びの再構築）
- ⑥ 論理的文章のテキスト形式と内容の評価・批評を振り返り、他教科への活用、生き方・価値観等の面から学びを自覚する（メタ評価化）

（2）授業展開—習得から活用・探究へ—

① 習得型学習1〈導入〉（1時間）—学び方の習得と課題の持ち方—

導入では見通しをもち課題をつかむシート（資料6）を使用し、「生きものはつながりの中に」の筆者である中村桂子氏の生命誌の定義を知らせ、それぞれの「生きること」について主体的に課題をもたせる。次にステップ1からステップ5までの「学び方」を確認する。

ステップ1では、「生きていること」に対するそれぞれの実感を記述した後、友達と話し合わせる。このステップにおける深い学びの鍵となるのは、どんな視点から教材文の主張や具体例を読み取り、どう見通しをもち「考えを形成」するかを明らかにすることである。教材本文の音読後「興味をもったこと、疑問に思ったこと、大切だと思ったこと」等について一人一人に初発の感想をもたせ、次の授業から児童の課題を解決する場面を設定する。

② 習得型学習2〈基礎〉（3時間）—正確で豊かな読み方の習得—

「生き物はつながりの中に」のように、論理的な文章の読み方・書き方を

学ぶ「報告・論文」の構成の型をもつ基本的なテキストを扱う上で重要なのは筆者の立場や専門性と説得力、論理的な構成とキーワード理解、引用と要約の方法、具体例と資料選択の方法等を、児童の実態や身に付けさせたい資質・能力から精選してカリキュラムを構成することであると考える。ステップ2では、筆者がどんな立場の方で教材を通して何を伝えようとしたのかを考えさせる。「生き物はつながりの中に」を正確に読み解く上でのキーワードとなる AI とその功罪について、既存の知識を発表させた後で図書資料やインターネットで情報を集めてまとめさせる。

次に、文章構成を捉え筆者のメッセージをつかませる。習得型学習段階では、情報を正確に・批評的に読み解くための力を全員に身に付けることが大切である。教材文のキーワードを一枚のシートにまとめ文章構成と各意味段落に基づき、教材文を読み取らせる。またこのテキストの特質として、ロボットの犬と本物の犬の対比により生物の特徴を解明するという点があるため、習得学習では子どもたちに対比による分析・考察の方法を身に付けさせたい。

③ 活用型学習（1時間）——対比による分析・考察の方法の活用——

これまでの習得型学習を生かし自分から発信する学習を行う段階である。探究・課題をもつシート（資料7）を使い、対比による分析・考察の方法を学習する。まずは「生きていること」についてどの視点から分析・考察するのか、子どもたちの興味・関心のありかや個性を生かしてテーマを決定する。その際、中村桂子氏が出演するノンフィクション映画「水と風と生きもの ～中村桂子・生命誌を紡ぐ～」の一部を見せ、民俗、医学、環境、文学などの視点から「生きていること」について追究するのかを決め分析・考察させる。

④ 探究型学習（3時間）——生きていることに対する「自分の考え」の形成——

探究段階では子ども達が既にもっている考えの構造・思考の枠組みを「自分らしい考え」により深化・構造化させることが重要である。探究・書くシート（資料8）を使い習得・活用で学んだテキスト形式論を踏まえて、「生きていること」についてレポート作成を行う。習得・活用学習と並行して「生きていること」に対する自分の課題を解決すべく身近な大人へのインタビューや図書、インターネット等を使い情報を収集するよう伝えておく。

⑤ まとめ・振り返り学習（1時間）

単元を通して学んだことや考えたこと、ここでは特に探究型学習で作成したレポートの「むすび」で「私にとっての生きること」として記述した自分の考えを交流することで、個々の学びを共有するとともに、次の国語の学習

や他教科の学習、自らの生き方に生かすことや今後の課題をもたせる。

(3) 国語科カリキュラム・マネジメントのゴールとしての自己の学び・自分という存在についての再考

実際の授業では6年生の全員の子どもたちが「生きていることに対する自分の考え」を、習得・活用で学んだテキスト形式論を踏まえたレポートとしてまとめ、レポートを読み合うことで自己の学びを振り返った。どの視点から「生きていること」について追究するかを決めるステップ、また自分の考えをレポートとして書くステップでは支援を要したが、一人一人が自分らしい視点から課題をもち、レポートを書くことができた。

子どもたちから「レポートは何を書けばいいか分からなかったけれど、書き方が分かった」「これまで文章はたくさん書かなくてはいけないから嫌だと思っていた。でも、たくさん書くことがいいのはなくて、言いたいことがちゃんと伝わるのがいい文章なんだということが分かった」等の振り返りの感想が出された。

公教育において、一人一人の児童の考えの確かな形成、そして書かれた文章だけでなく自分や他者が書いた文章の内容や形式についても精査・解釈する力は全ての子どもたちに身に付けさせる必要がある。また単元の子どもたちの学びの振り返りでは「自分で生きることについてのレポートを書いてみて、筆者の考えはすごいんだということが分かった」（筆者の専門性・個性の尊重）、「みんなのレポートを読んで、一言で生きるといってもいろいろな考えがあるんだなあ、おもしろいなあと思った」（生の見方・考え方の多様性）、「これまで生きるとはどんなことかなんて考えたことがなかった。授業で考えていくうちに、どんどん分からなくなったから、今後自分で答えを見付けたい」（生の実感・生き方につながる課題の発見）等の感想・意見が出された。

本単元で、小学校教育のゴールである6年生の子どもたちは自己の学びを振り返り、新たな課題を見出して次の学びにつなげる等、子どもたち自身がカリキュラム・マネジメントを自覚して学習することができた。さらに、「生きるとは何か」という問いから自分という存在について再考し、今後いかに生きるべきかという本質的な問いをもつに至った子どもたちが多くいた。

6 次世代型カリキュラム・マネジメント（教育課程編成）の課題

新学習指導要領の目標を授業改善レベルで具体化する時、「深い学び」「学ぶに向かう力、人間性（等の涵養）」とは何ができることか、各授業や単元

構想、各教科と領域を超えたカリキュラムをどう構想し実践化し評価するかというカリキュラムデザインの本質性や系統的な妥当性等が重要である。

例えば、カリキュラムの全体像と「確かな習得（基礎・基本的な知識・技能）」や「思考力・判断力・表現力等（活用）」の学習とはどうつながるのか。いわゆる活用型の資質・能力とすることができる「思考力・判断力・表現力等」、「習得」「活用」を踏まえた主体的・探究的（総合的）な「課題発見・解決能力」育成の学習・評価システムをどのように再構築するのか。「論理的思考力・表現力」の習得・活用（探究）力育成を各教科でどう対応するのか、ここでの国語科学習の役割や系統性の位置づけはカリキュラム・マネジメントに直結する事項でもある^(注15)。

これらの実践課題は日本の子どもたちの資質・能力（学力）面で最大の弱点と語られ続けてきた部分の克服につながる点であり、同時にこれは戦後以降のカリキュラム・マネジメント（教育課程編成）や教育実践、授業力・教師力育成の課題でもあると思われる（ここでの詳細は省く）。

今後は、求められる資質・能力との関係から評価方法開発、教科の固有性の重視とともにそれらの学びを活かした「メタ認知」「汎用性」の具体的な解明が急務である。これは「深い（人間的）学び」もここに関ってくる。パフォーマンス課題と評価、ルーブリック等の観点からのとらえ直し、課題発見・解決能力や新たな価値観・生き方の形成につながる学びの振り返り（メタ認知能力）の開発等を位置付けた提案が求められる。

7 おわりに

—2030年以降の社会を生きる子どもたちの資質・能力育成—

新学習指導要領のめざす資質・能力型教育の方向性は「2030年以降の社会を展望した教育政策の重点事項」（「第3期教育振興基本計画」2018年6月）の中で、「自立した人間として、主体的に判断し、多様な人々と協働しながら、新たな価値を創造する人材の育成」「夢と志を持ち、可能性に挑戦するために必要となる力を育成する」、創造的・批評的な課題発見・解決能力と人間性の涵養（態度）等としても記されている（下線部は佐藤・左近による）。

複雑多様な見方や価値観が混在し正しい答えが見えにくい現代情報社会、そしてストレスフルな人間関係に絶えずさらされる現代とこれからを、今、ここに在ることの価値と尊さを自覚し、自分らしくたくましく生き抜く力を育てるためには、まず多様な情報に翻弄されず、何が、なぜ、どう課題なのかを正しく判断・洞察し「世界」「他者（社会）」「自己」と誠実に、批評的・

創造的に向き合う資質・能力を育てることが必要である。

本稿はそのための、国語科を学ぶ意義・価値（「見方・考え方」）を基軸にした系統的・構造的な（教科横断的な視点による）カリキュラム・マネジメント研究である。国語科説明文学習を例に、いわゆるスタートカリキュラム（小1）とゴールとしてのカリキュラム・マネジメント開発（小6）の一例を提案した。管見によれば、こうした発想からの実践的な研究提案、授業検証等はカリキュラム研究や教育方法・教科教育の分野（学会）でも未だほとんど行われていないのが現状である^(注16)。

なお、開発した全学習シートの例示や実際に児童が記述した学習シートの分析や考察、児童の学びの過程や変化・変容等の一部についてとその考察は、「4」の（3）及び「5」の（3）に記載した。

【付記】

本稿は佐藤洋一（研究発表）「批評的・創造的な『言語力』を育成するための国語科教材開発」（日本教材学会設立25周年記念大会、2013年日本大学文理学部）、同「批評的・創造的な授業開発——テキスト形式に着目した21世紀型学習——」（第127回全国大学国語教育学会、2014年筑波大学）、同「21世紀型授業開発と国語科『活用型テキスト形式』」（第128回同学会・兵庫大会2015年）等の理論的提案を基に、資質・能力型教育論からのカリキュラム開発と実践（左近妙子構想・実践）の一部を論文化したものである。

合わせて、佐藤洋一・左近妙子「資質・能力を育てる多様なテキスト形式、『考えの形成と深化』——『空を見上げて』（中学1年）の『精査・解釈』・汎用性（リジリエンス）——」『愛知教育大学教職キャリアセンター紀要 第3号』（愛知教育大学2018年）、同「『深い人間的な学び』を創造する伝記教材の授業——『杉原千畝』（開発教材）と向き合う小学六年生——」（愛知教育大学研究報告第66輯 2017年）等、御参照いただければ幸いです。

【注記、主な参考文献】

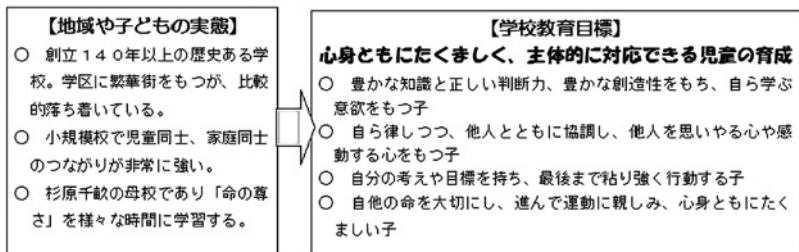
- 1 国立教育政策研究所編『資質・能力（国研ライブラリー）』（東洋館出版社2016年）、合田哲雄「国語科におけるアクティブ・ラーニングとは」『教育科学国語教育2016年5月号』（明治図書）、石川一郎『2020年の大学入試問題（講談社現代新書）』（講談社2016年）、「『深い』学びとは何か」『教育新聞2016年2月1日号・社説』（教育新聞社）、大迫宏和『アクティブ・ラーニングとしての国際バカロレア』（日本標準2016年）等。
- 2 東京大学教育学部・カリキュラム・イノベーション研究会編『カリキュラム・イノベーション』（東京大学出版会2015年）、中原淳監修（脇本健弘・町支大祐著）『教師の学びを科学する——データから見える若手の育成と熟達モデル——』（北大路書房

- 2015年)、奈須正裕『資質・能力と学びのメカニズム』(東洋館出版2017年)等、その他溝上慎一・三宅ほなみ・松下佳代・西岡加名恵・立田慶裕各氏等の論考がある(詳細は略)。
- 3 石井英真『今求められる学力と学びとは——コンピテンシー・ベースのカリキュラムの光と影——』(日本標準2015年)、安彦忠彦『「コンピテンシー・ベース」を超える授業づくり』(図書文化2014年)、同「次期学習指導要領の課題(視点・論点)」(NHKONLINE 2016年9月21日)、『戦後日本の教育と教育学(講座・別巻)』(かもがわ出版2014年10月)等、詳細は略。
 - 4 奈須正裕・西岡加名恵・石井英真各氏等による教科を取り込んだ意欲的な授業づくり提案があるが、教育学の枠組みからの総論的提言に留まり教科の専門性や本質を踏まえたものとは言いがたい面が強い。
特に、到達目標(資質・能力)に対応した質的評価を見取る評価規準(基準)の作成やメタ認知の開発、テキスト形式への視座等は欠落しているか漠然としている(奈須正裕・江間史明編著『教科の本質から迫るコンピテンシー・ベースの授業づくり』図書文化2015年等)。佐藤洋一(研究発表)「資質・能力育成と「中核的な教科」(国語科)の位置」(第133回全国大学国語教育学会福山大会、2017年11月福山市立大学等)。
 - 5 注2・3に同じ。
 - 6 佐藤洋一「国語科におけるアクティブ・ラーニングの課題」『月刊国語教育研究(No.526)2016年2月号』(日本国語教育学会編刊)、佐藤洋一・森和久・有田弘樹「国語科におけるアクティブ・ラーニングの開発と課題——『質の高い深い学び』につなげる活用型テキスト」『愛知教育大学教職キャリアセンター紀要 第1号』(愛知教育大学2016年3月)等。
 - 7 佐藤洋一「資質・能力型のカリキュラムと評価がみえにくい」『教育科学国語教育2018年1月号 特集・新学習指導要領国語科を「評価・する」(明治図書)。同「資質・能力を育てる「言葉による見方・考え方」(読むこと)——テキスト内容と形式への評価、批評の視点から——」『教育科学国語教育 2018年2月号』(同)、佐藤洋一・研究会編著『21世紀型教育研究——新たな学びを創る(紀要第2号)』(2017年)等。
 - 8 【付記】参照及び佐藤洋一・有田弘樹「資質・能力を育てる古典学習の開発——「竹取物語」(中1)と「精査・解釈」「考えの形成、共有」(『愛知教育大学研究報告第67輯』2018年)、左近妙子「多様な背景をもつ翻訳教材による『深い学び』——『のどがかわいた』(小学校六年)を例に——」(『子どもが楽しく生き方と洞察力を育む授業の提案・報告』2017年)等。
 - 9 資質・能力型教育における、いわゆる計測しがたい人間性や価値判断力等に関する領域(態度や行動、意欲にみられるその人らしさ、感性や価値観、ユーモアと自己客観化能力、批評精神等)、非認知能力・スキルの重要性の提言は早くからなされてきたが、教育課程編成論や授業研究・学習評価論としての具体化は今後の課題である。
宇野カオリ『「レジリエンス・トレーニング」入門』(電波社2018年)、アンジェラ・ダックワース著・神崎朗子訳『GRIT やり抜く力』(ダイヤモンド社2016年)中室牧子『学力の経済学』(ディスカバー・トゥエンティワン2015年)、ポール・タフ著・高山真由美訳『成功する子 失敗する子』(英知出版2013年)等。
 - 10 注9に同じ、及び【付記】文献参照されたい。

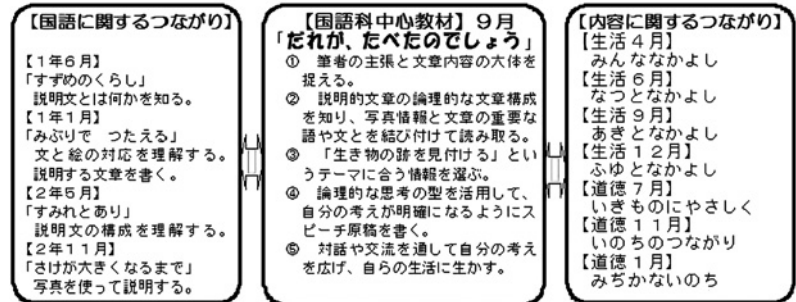
- 11 説明文「だれがたべたのでしょうか」を本稿でのコンセプトのような資質・能力育成、小学校1年から6年を見すえた系統的なカリキュラム・マネジメント観点から授業構想したものは管見では見られない（注16も参照）。
他社の教科書教材も同様に、ほとんどは入門期・低学年説明文学習として話型・文型と音読、「問いと答え」の論理性、「写真（イラスト）と説明」の型の対応、主体的な「クイズ作り」学びの定着化と振り返り等が行なわれてきている。
- 12 注6・7・8に同じ。
- 13 注11同様、「生き物をつながりの中で」を資質・能力、系統的なカリキュラム・マネジメントの観点から構想した実践事例は見受けられない（注16参照）。
- 14 中村桂子「生きものであることを忘れずに」（光村図書2011年『小学校国語学習指導要領六創造上』筆者の言葉より）、同「生命誌とは何か」（講談社2014年）、同「いのち愛づる生命誌 38億年から学ぶ新しい知の探究（藤原書店2017年）、同「絵巻とマンガラで解く生命誌」（青土社2017年）、同「いのちのひろがり」（福音館書店2017年）等。
- 15 佐藤洋一編著『国語科「習得・活用型」学力と授業モデル（全4巻）』（明治図書、2011年）等。
- 16 文科省・国立教育政策研究所編著『発達や学びをつなぐスタートカリキュラム』（学事出版2018年）、高木展郎監修・矢ノ口勝之著『学習指導要領「カリキュラム・マネジメント」の進め方』（小学館2018年）、田村知子・村川雅弘他編著『カリキュラムマネジメントハンドブック』（ぎょうせい2016年）、村川雅弘編集『カリマネ 100の処方』（教育開発研究所2018年）、原田信之編著『カリキュラム・マネジメントと授業の質保証——各国の事例の比較から——』（北大路書房2018年）等。

【資料1】 小学校1年 国語科カリキュラム・マネジメント（開発例）

小学校1年 国語科カリキュラム開発例



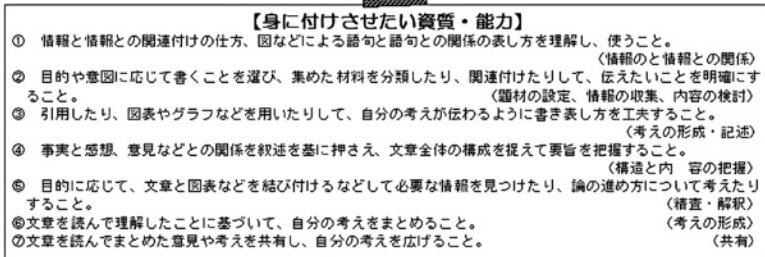
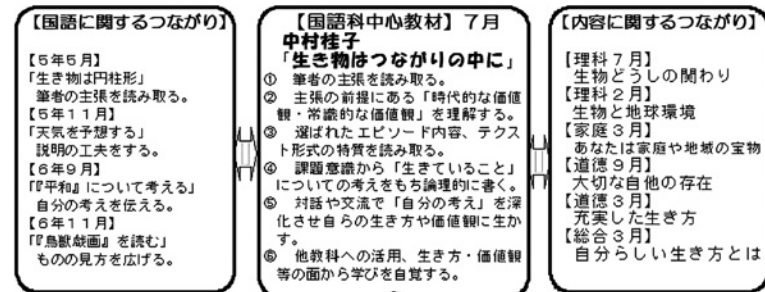
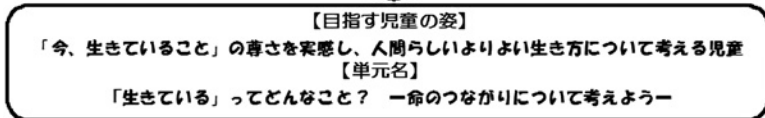
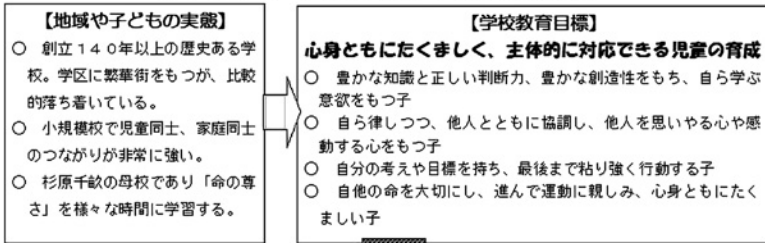
【目指す児童の姿】
自分以外の生き物の存在を知り、「今、生きていること」を実感することのできる児童
【単元名】
いきものあと み〜つけた！



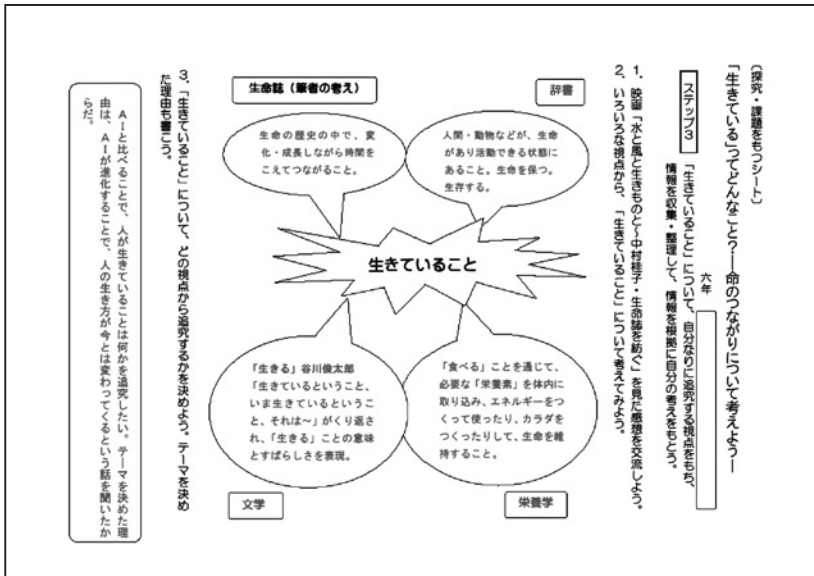
- 【身に付けさせたい資質・能力】**
- ① 身近なことや経験したことなどから話題を決め、伝え合うために必要な事柄を選ぶこと。
（題材の設定、情報収集、内容の検討）
 - ② 互いの話に関心をもち、相手の発言を受けて話をつなぐこと。（話し合いの進め方の検討、考えの形成、共有）
 - ③ 自分の考えが明確になるように、簡単な構成を考えること。（構成の検討）
 - ④ 時間的な順序や事柄の順序などを考えながら、内容の大体を捉えること。（構造と内容の把握）
 - ⑤ 文章の中の重要な語や文を考えて選び出すこと。（精査・解釈）
 - ⑥ 文章の内容と自分の体験とを結び付けて、感想をもつこと。（考えの形成）
 - ⑦ 文章を読んで感じたことや分かったことを共有すること。（共有）

【資料2】 小学校6年 国語科カリキュラム・マネジメント（開発例）

小学校6年 国語科カリキュラム開発例



【資料7】 生き方や価値観の再構成に関わる「深い学び」の具体化



【資料8】 情報の収集、内容の検討と自分の考えの形成

はじめ	か	め	す	ひ
<p>☆「生きていくこと」についての自分の考え</p> <p>私は「人が生きていくこと」は、</p>	<p>☆自分の考えの構成となる情報</p> <p>①考えをめぐらせ出すために集めた情報の整理</p> <p>②必要な情報を並び、友達に理解し分ちあひやくし記述</p>	<p>☆「生きる」とはどんなことか</p> <p>☆「生きる」とはどんなことか</p> <p>☆「生きる」とはどんなことか</p>	<p>☆私にとっての「生きる」とは</p> <p>☆「生きる」とは</p> <p>☆「生きる」とは</p>	<p>☆私にとっての「生きる」とは</p> <p>☆「生きる」とは</p> <p>☆「生きる」とは</p>

「生きていくこと」の学びが、命のつながりに通じて深まろう。

六年

評書者・栄養学・文学の学びを通して、生き方や価値観の再構成が図られる。

「生きていくこと」の学びが、命のつながりに通じて深まろう。

六年

評書者・栄養学・文学の学びを通して、生き方や価値観の再構成が図られる。

「生きていくこと」の学びが、命のつながりに通じて深まろう。

六年

評書者・栄養学・文学の学びを通して、生き方や価値観の再構成が図られる。

「生きていくこと」の学びが、命のつながりに通じて深まろう。